

はじめに

\*世界第2の経済大国から衰退途上国へ

I. 時代の変化と研究の変質

\*二つの全国的研究会の盛衰

- ・山梨文化財研究所のシンポジウム(萩原、網野・石井)
- ・中世都市研究会(網野・石井・大三輪、五味・玉井・小野)

→活発な学際的研究、若手・中堅の意欲的活動. 全国城郭研究者セミナーも隆盛期

1980～90年代前半の象徴的な研究集会、90年代後半は退潮.

\*バブル崩壊後の研究熱量の減退

- ・21世紀の入口で石井・網野両氏の死去、担い手の欠乏.
- ・地方の衰退—受入先の問題、参加者の激減、開催地は東京.

→地方の衰退と東京一極集中. 文献史の公武統一政権論、地方への眼差しの後退.

II. 香川県の調査・研究の動き

1. 学際的研究の盛衰

\*港町の調査・研究、私費による自主的活動

- ・20世紀末から継続—港町の原像(報告書・シンポ)、論集刊行(2009・2016年)
- ・全国で退潮する中で活発化、地域からの情報発信、多様な調査・研究手法.
- ・シンポと論集は中世港町研究に一石、若手・中堅参加者の自信と自覚.

\*調査研究活動の退潮、担い手の消滅

- ・メンバーの多忙化、熱量のある若手・中堅の減少. 『港町の原像』下巻の刊行遅延.

2. 底流にあった動き

- \*「町歩き」による地域の再発見—観光と市民を巻き込んだ地域認識の育成の動き.
- \*香川県庁舎の重文指定—丹下健三設計の庁舎を重要文化財に、その間の調査・研究.

3. 地域研究再稼働の兆し

\*瀬戸内国際芸術祭に対する異論—アート中心の島興しだけで良いか.

\*瀬戸内国際芸術祭の報告書作りのための調査・研究

- ・香川県・香川大学・ベネッセの協同 2020年前後、中間報告書刊行、自然・人文・工学系の学際的メンバーで構成. 県庁・埋文の職員も一部関係.
- ・本報告書作成実現せず、参加者・関係者に残したもの.

\*瀬戸内の島々の調査

- ・生活・文化・歴史の掘起こし. 住人との連携、埋文・博物館等の職員による調査.
- 住民の「郷土」認識を刺激し地域興しを支援. 私費の活動(一部ベネッセの助成金).
- ・「港町の原像」以降、底流となっていた地域研究の理念・目的が表面化.

III. 新たな学際的地域研究による地域の復権へ

1. 文献史学の研究状況

\*集権論中心の議論、地域・地方の比重低下

\*デジタル化による史料検出・収集が容易に、新出史料の増大.

- ・文書・記録だけでやることが多い、学際的研究の必要性を感じない.
- ・効率性は良いがアナログ的手法で得られるものを失う. 問題が絞れる反面で限定的に.
- ・若手のうちから市民向けの著書刊行、稿料・印税の味とポピュリズムの誘惑.

\*地域を蔑ろにした論考、内輪だけの閉ざされた地域研究の弊害

- ・恣意的な史料読み、根拠なしの主張、地域の問題で捉えるのは矮小化との主張.
- ・地域の不動の定説を墨守、地元の知識人の指導—偽文書、改竄史料を平然と使用.

\*遺跡の保存と整備—40年近く関わった九州の事例

- ・市長とともに方針も変化、ヒラメ型の担当者、担当者の能力低下が深刻

## 2. 地域や民衆を重視する研究と地域再生

\*最近執筆の拙稿の実践から—科研費の成果論集

- ・日本石造物の成立と展開をアジアの中で考える、文献・考古・博物学・理系の協同.
- ・石造物研究は民衆を補足できるのか. 一石五輪塔調査の進展に対応.
- ・15~17世紀に増大する小型石塔・石仏に着目、とくに簡略型に焦点.
- ・高野山過去帳と宿坊文書の分析、高野山の供養と四十九院・石塔造立について考察.
- ・大名・家臣団と地域住民(民衆)の供養の内実と石塔の有り様.

\*模擬一石五輪塔の再評価

- ・石工が加工したとは考えがたい小型で粗雑な一石五輪塔もどきの石.
- ・絵図に見える奥ノ院の巨大五輪塔や霊屋の裏や透き間に立つ簡略な構造物.
- 五来重氏の仏教民俗学、宮田登氏の弥勒信仰、水谷類氏の廟墓ラントウ論等に学ぶ.
- ・学際的手法による庶民の供養の実像. 石造物を専門としない立場からの問題提起.

## IV. 香川県からの新たな情報・成果の発信

### 1. 考古学の強みを発揮した地域研究

\*通時代的で多様なモノ資料を扱っている.

- ・遺跡の重層性、時代を超えた多様な遺物を検討する機会.
- ・遺構の新旧関係や構造を讀解き、遺物の生産地や流通を考える作業の連続.

\*遺跡の自然的・地域的環境をよく知っている

- ・地形・気候・交通(旧道・海水路)

### 2. 遺跡の評価に必要な視点・方法

\*主要な遺跡の実態と特徴を地域で考える.

- ・内容・特質を把握、地域の歴史の中に位置づける. 市町村、旧国程度の地域で検討.

→全国各地の事例を参考にしても、いきなり機械的類型化や結論付けに走らない.

\*中地域での位置づけから全国での位置づけ(展望)

- ・四国、中四国地域での位置づけ、共通点と相違点の考察.

→共通するもの(交流が齎すもの)、他にないもの(地域の個性)

### 3. 成果の全国発信と継続的な人材育成

\*本格的なシンポジウムの開催と

- ・主要な調査成果を学際的多面的に検討・深化.
- ・若手・中堅のヤル気を刺激・育成、市民・県民の関心を高揚させる仕掛け.

\*全国に出回る書籍の刊行

- ・ネット配信(情報収集にはよいが要件のみになりがち)、関心のある市民や研究者向けには書籍にすると効果的.